

## 総合科学研究プロジェクト

総合科学部では、平成八年度から学部理念に則り、文系と理系にまたがる共同研究を始め、様々な形の総合的、学際的研究を育成、推進することを目的とした「総合科学研究プロジェクト事業」を実施している。

### 「総合科学の到達点と課題」の報告



吉田光演  
(言語文化科学プログラム)

今年には総合科学部創立三十周年だが、その道のりは平坦なものではなく、学部の進むべき方向の模索が今なお続いている。学部直結した総合系大学院の創設に向けて絶え間ない努力がなされているのもその現れである。本研究プロジェクトの趣旨は、この状況を背景に、つまり「総合科学とは何か」を問い、将来への提言を行うことであつた。学生諸君にも関心があるテーマだと思われるので、その内容を紹介したい。報告書もあるので、詳しい内容についてはそちらを読んでいただければ幸いである。

### プロジェクトの主な内容

【構成】…吉田光演（言語文化研究講座）、佐藤正樹（広域文化研究講座）、早瀬光司（自然環境科学研究講座）、山崎昌廣（行動科学講座）、平手友彦（言語文化研究講座）、布川弘（広域文化研究講座）、吉村慎太郎（社会環境研究講座）、岩永誠（行動科学講座）。

【目的】…総合科学とは、特定課題に対する多分野からの接近というプロジェクト型研究であるのか、様々な分野が共存し新しい学問が生成する試行の場合なのか、研究パラダイムの変更を促す新しい学問なのか、未だに定義が定かではない。研究主体に関しても、研究者個人でなし得るとする説、専門分野を異にする複数の研究者集団で行うものという説もある。そこで、従来の科学研究を振り返り、学問の総合のあり方を検討し、過去の総合科学の教育研究を検証する。これによって総合科学を定義し、招来の総合科学部像を確立する。

【主な活動】…（公開）研究会、公開研究会、総合科学（部）に関係する過去の資料の収集・分析・検討、アフター5セミナーへの参加、二十一世紀COE案作成への関わり、総合科学部生による総合科学関連推薦図書ランキング作成、総合科学部生による「総合科学部」イメージ座談会、総合系大学院

構想についての議論への参加、平成十五年度「超域研究」パネルディスカッション担当、研究プロジェクト報告書作成など。

### 総合科学・総合科学部をめぐる議論について

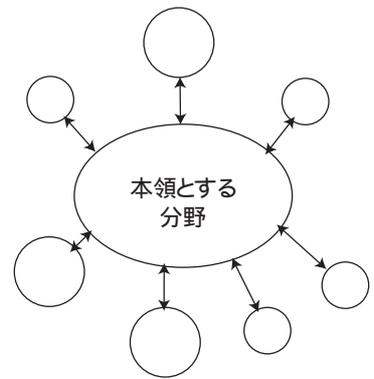
日本の大学は学部の縦割り意識が強く、文系・理系の壁も厚く、総合科学の推進には困難が伴う（それは世界的趨勢ではない）。総合科学の方向性としては、いわゆる学際領域の創出のほかに、個別学問の違いを残してそれらを包括する論理和としての総合科学、個別学問の共通部分を抽出する論理積としての統一的な総合科学の実現の2つの方向が考えられる。の総合は、比較的容易く実現可能であり、現在の総科組織もこの形態に近いが、学問論として見れば、単なる寄せ集めの観もある。文系・理系の橋渡しについても真剣には考えられない。は学問としては新しいもので、文系・理系の壁も突破でき、画期的であるが、この可能性について本格的に議論されたことはなかったと言える。総合科学部教員の多くは、既存学部の教育研究の経験を土台にしており、学会も既成の学部区分に基づくものが多い。こうしたしがらみを捨て、新たな知の基盤を組織的に構築することに相当の困難がつきまとう。現代科学の細

分化状況の下で、異なる学問分野についてのアプローチをいかに獲得できるかという問題もある（しかし報告書所収の吉村氏の『総合科学者』のつくり方」はこの可能性を提唱している）。そこで折衷的案として登場するのが、幾つかの研究分野の相乗りによる暫定的プロジェクト研究である（我々が行っている研究プロジェクトもその一環である）。プロジェクト研究は、アイデアとチームワークが進めば、成果が見込めるが、長続きしにくく、学生を巻き込んだ教育への応用が難しい。結局、教員も常に総合科学者としてのアイデンティティ確立についての悩みを抱えているのだ。そこで、実行可能な総合科学として考えたものが、個々の研究者のネットワーク化による共同作業としての総合科学のイメージである。佐藤正樹氏（現学部長）による「総合科学とはなにか？」（報告書所収）では、総合科学像は、個別科学を足して2で割るような学際性によるのではなく、それぞれの学問を拠点にしつつ、異分野に深く入り込んで、ネットワークを形成するイメージ（クモの巣としての総合科学）として把握されている。

総合科学のイメージ

*Interdisziplinarität*

拡大と吸収



わずかなハードサイエンスを除けば、現代科学は、狭い個別分野の中に閉じた象牙の塔では実現不可能であり、現代文明や環境問題など、二十一世紀の深刻な課題の解決のためには、諸学を見渡す広い地平が必要である。その意味で総合科学の存在意義は大きい。

「超域研究」での実践

本プロジェクトの特色としては、研究面だけでなく、学生との共同作業（総合科学関連文献リスト作成）や、教育場面で「総合科学」を実践したことである。総科の必須科目は教養ゼミと超域科目（超域研究、展開研究）しかない。学部生全員が一同に集う授業は超域研究だけである。そこで、平成十五年度後期の超域研究（計七回）では、プロジェクトメンバーの多くが参加して、教員と学生で「総合科学を考える」討

論授業を行った。佐藤正樹氏の基調報告に始まり、教員による学生への挑発的意見、教員同士の激論も交え、学生による班別討論、全体討論を行い、総合科学の長所と短所、現代文明論へのアプローチの方法について議論した。「総科で一年間のモラトリアムを求めるだけでは不十分」、「リーダー・まとめ役を育てる」ことが総科の売りだが、「広い知識は得られても、深さは無理」といった意見が寄せられた。「自分たちの学部のあり方について学生が議論できるのは総合科学部だけだ」という意見もあった。このようなメタ学問論（学問についての学問的議論）を学生が自覚してほしいということが目標だったので、目論見は成功したわけである。最終の全体討論も白熱したものとなり、「ディベートする総合科学部生」というイメージも社会的にアピールできるように思われる。もっとも、「教養教育の科目が面白くない」、「各プログラムの内容が違いすぎて、全体がつかめない」といった批判も少なからずあった。大切なことは、教育研究における成功も失敗も、学部の多くの成員が共有できるようなオープンな雰囲気を作り出すことである。今後も総合科学（部）に関する教員学生の意識が高まり、総合科学の学問的ネットワークが繋がって広がっていくことを心から期待したい。